

F 20 明治中期から大正末期における小学校「裁縫科-洋裁」教育について
兵庫教育大 ○田中陽子 岩崎雅美

目的 被服教育の価値が日本の教育史の上でどのように展開し、構築されてい、たかを
知る一列として、明治以降の「裁縫科」の中で、洋服がどのように教材化され、教授され
てい、たかを明らかにする。

方法 明治中期から大正末期までの裁縫教科書(小学校教師用)を資料とし、洋服に分
類されると考える教材の内容を整理する。主にデザイン、技術、用語等の変遷から教材化
の観点と方法を、また本文の記述内容から指導方法及び指導過程と考察する。さらに洋裁
の教育的価値と効果、あるいは問題点等を探るため、教育雑誌から洋装に対する教師の考
え方や、研究過程や授業実践など洋裁教育に関連する事柄を拾い出し検討する。また、教
師にほむための専門知識を知るために、師範学校の教科書も参照する。

結果 明治時代に西欧化政策として洋服が導入されたことは、小学校の「裁縫科」にも
影響を与えたが、和裁だ、た「裁縫」に洋裁が加わるのは明治末頃である。当時の洋服は
正式なものは外出着で、その他は付属品として和服に加わっている。故に教材にはそれら
を助けるものが選ばれたと考えられ、シャツ、ズボン下、改良前掛け、エプロンがその具
体的な例である。その後、子ども服や婦人下着などが時代の要求にふえるように教材化さ
れている。それらの裁断技術をみると、初期には直線裁ちや折り裁ちがみられ、従来の和
裁技術を応用して、抵抗感を少なくした工夫がみられる。